現代博物館における大屋根と入口まわりの空間構成

安田研究室　17B08787　曽根 巽（SONE,Tatsumi）

1. 序 博物館へのｱﾌﾟﾛｰﾁは、館において最初に体験する空間であり、重要な設計要素の一つである。また、日本の博物館においては景観への配慮や展示内容等、様々な目的で勾配屋根が採用されている。特に大屋根をもつものは、ｱﾌﾟﾛｰﾁからの大屋根の見え方や、軒下空間に来館者をいかに気持ちよく迎え入れるかという設計者の考えが反映されていると思われる。本研究では大屋根[注1)]を持つ現代の博物館[注2)]を対象とし、大屋根と入口まわりの空間構成を検討することで、来館者を迎え入れる手法の特徴の一端を明らかにすることを目的とする。

2. 大屋根と入口まわりの形状

2-1. 大屋根の形状　主要な屋根[注3)]を**切妻**、**寄棟**、**入母屋**、**方形**に、軒下に入る地点でのｱﾌﾟﾛｰﾁの方向を**平入り**、**妻入り**に整理した（表1）。**切妻**（53/76）が最も多く、**寄棟**（13/76）が次に多い。**入母屋**（5/76）は**平入り**のみで、妻入りの事例はみられなかった。平入り、妻入りの区別がない**方形**（5/76）も一定数みられた。屋根の数は、**単数**（24/76）よりも**複数**[注4)]（52/76）が多い。棟が直線で**変形なし**のものが大半（65/76）であり、曲線等で**変形**させた事例（11/76）もみられた（表2）。

2-2. 入口まわりの形状　入口まわりの屋根形状を、**軒**[注5)]、大屋根の下に片流れの屋根をもつ**下屋**、屋根の一部を延長もしくは分離した小さな屋根をもつ**向拝**、軒の出が浅い**なし**に分類した（表3）。入口まわりにおける壁面の操作を、庇、廊等の要素が付加された**凸**と、ﾎﾞﾘｭｰﾑが欠き取られた**凹**に分類した（表4）。

3. ｱﾌﾟﾛｰﾁにおける屋根と軒の見え方　ｱﾌﾟﾛｰﾁと屋根の見え方の関係を検討した。建物の真正面に向かう正面性の強いｱﾌﾟﾛｰﾁで、屋根が一面のみ見える事例は3割程である（**一方向**、23/76）。残りは建物に正対しない、もしくは屈折したｱﾌﾟﾛｰﾁを含み、屋根面が2面以上見える事例である（**多方向**、53/76）。ｱﾌﾟﾛｰﾁ上の階段やｽﾛｰﾌﾟのﾚﾍﾞﾙ差で、ｼｰｸｴﾝｽに抑揚をつけ、屋根や軒裏を印象づける位置を検討した。**屋根面が見える**位置、**軒裏が見える**位置、**軒下**に整理した（表6）。また、ｱﾌﾟﾛｰﾁにおける軒下空間は、視線のみが抜けるものと、動線も通るものに分類した（表7）。

4. 大屋根と入口まわりの空間構成　2章1節で検討した大屋根の形状と2節で検討した入口まわりの形状を合わせて検討し、8つのﾊﾟﾀﾝを得た（表8）。①②③は深い**軒**を持つもので、大屋根と入口まわりを同じ屋根で構成している。そのうち①は**切妻**の**平入り**で、軒下を歩かせるｱﾌﾟﾛｰﾁが多い。②は**切妻**の**妻入り**で、入口まわりの凹凸が少なく、切妻の形状を純粋に見せる表現であると考えられる。③は**寄棟**の**妻入り**で、ｱﾌﾟﾛｰﾁ上にﾚﾍﾞﾙ差のあるものが多い。階段を**屋根面が見える**位置と**軒裏が見える**位置の境界に配し、屋根が見えるｱﾌﾟﾛｰﾁを延長し、同時に抑揚をつけている事例もみられた（No.11）。④⑤⑥は

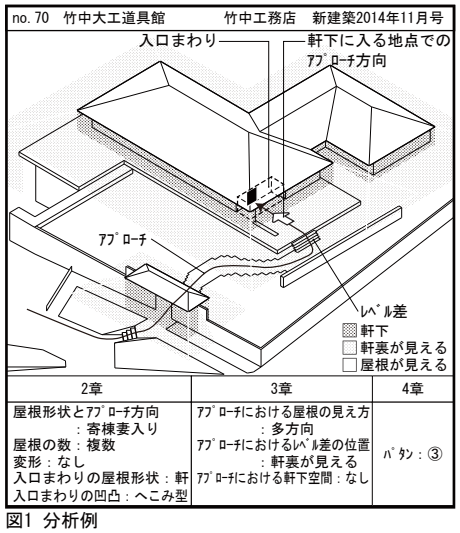


図1 分析例

表1 屋根形状と軒下に入る地点でのｱﾌﾟﾛｰﾁ方向

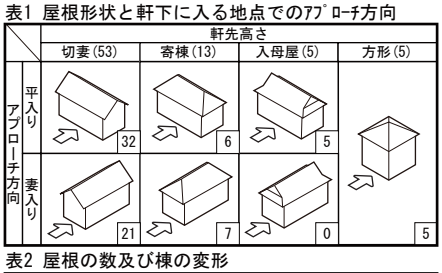


表2 屋根の数及び棟の変形

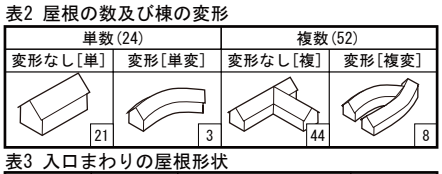


表3 入口まわりの屋根形状

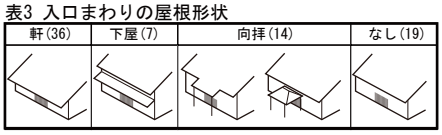


表4 入口まわりの壁面に対する凹凸

表5 ｱﾌﾟﾛｰﾁにおける屋根の見え方

表6 ｱﾌﾟﾛｰﾁにおけるﾚﾍﾞﾙ差の位置

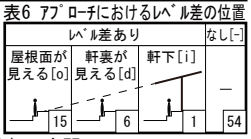
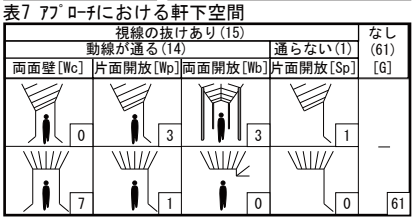


表7 ｱﾌﾟﾛｰﾁにおける軒下空間



下屋や**向拝**によって入口まわりの屋根が大屋根と関連付けられた表現がなされている。そのうち④は**切妻**の**平入り**で、軒下空間で来館者を迎え入れるという点で①と似た性格をもつが、下屋により高さが抑えられている。下屋の軒下空間に沿って歩く演出がなされているｱﾌﾟﾛｰﾁもみられた（No.61）。⑤は**入母屋**の**平入り**に**向拝**を用いたもので、社寺等の木造伝統建築を直接的に参照した表現であると考えられる。⑥は**切妻**の**妻入り**で、②が切妻そのものの形状を純粋に見せているのに対して、切妻をｽｹｰﾙﾀﾞｳﾝしたような**向拝**をもち、大屋根と入口まわりの屋根が相似した表現である。⑦⑧は入口まわりの軒の出が浅いもので、大屋根と入口まわりの表現に関連性はみられず、⑦は平側の、⑧は妻側の大きな壁面に凹凸を加えることで来館者を迎えている。

ｱﾌﾟﾛｰﾁに関して、**平入り**の事例に着目すると、、屋根を**一方向**から見せる正面性の強いｱﾌﾟﾛｰﾁや、**屋根面が見える**位置でのﾚﾍﾞﾙ差による抑揚は、大屋根の象徴性を増強する手法であると考えられる。

5. 結　現代の博物館を対象に、大屋根と入口まわりの空間構成を検討し８つのﾊﾟﾀﾝを導いた。下屋、向拝といった大屋根の表現と関連付けたﾋｭｰﾏﾝｽｹｰﾙの実現、大屋根を印象付けるｱﾌﾟﾛｰﾁの手法を見出した。以上、大屋根をもつ博物館における来館者を迎え入れる手法の特徴の一端を明らかにした。

注

1) 建築大辞典（第２版、1993 年、彰国社）によれば屋根は「建築物の上方に位置し，外部に面して空間を覆うもの。［中略］我が国では軒の出のある傾斜した面を持つもののみを指すのが普通」とある。本研究では、大屋根を大棟または隅棟を持つ単数または複数の軒の出のある屋根で、建物の過半を覆っているものと定義する。
2) 主要な専門誌である「新建築」に 1990 ～ 2020 年の過去 30 年間に掲載された博物館建築のうち、前注の大屋根を持つもの計 76 事例（表 9）を対象とする。
3) 博物館機能が入るﾎﾞﾘｭｰﾑにかかる屋根のうち、最も大きい面積を占めるものを主要な屋根として扱っている。
4) 屋根に分節があるものもしくは複数のﾎﾞﾘｭｰﾑからなるものとする。
5) 軒の出が、建築基準法において軒下空間が建築面積に算入される 1m 以上のものとする。表３中の「なし」は 1m 未満のものとする。

表8　大屋根と入口まわりの空間構成

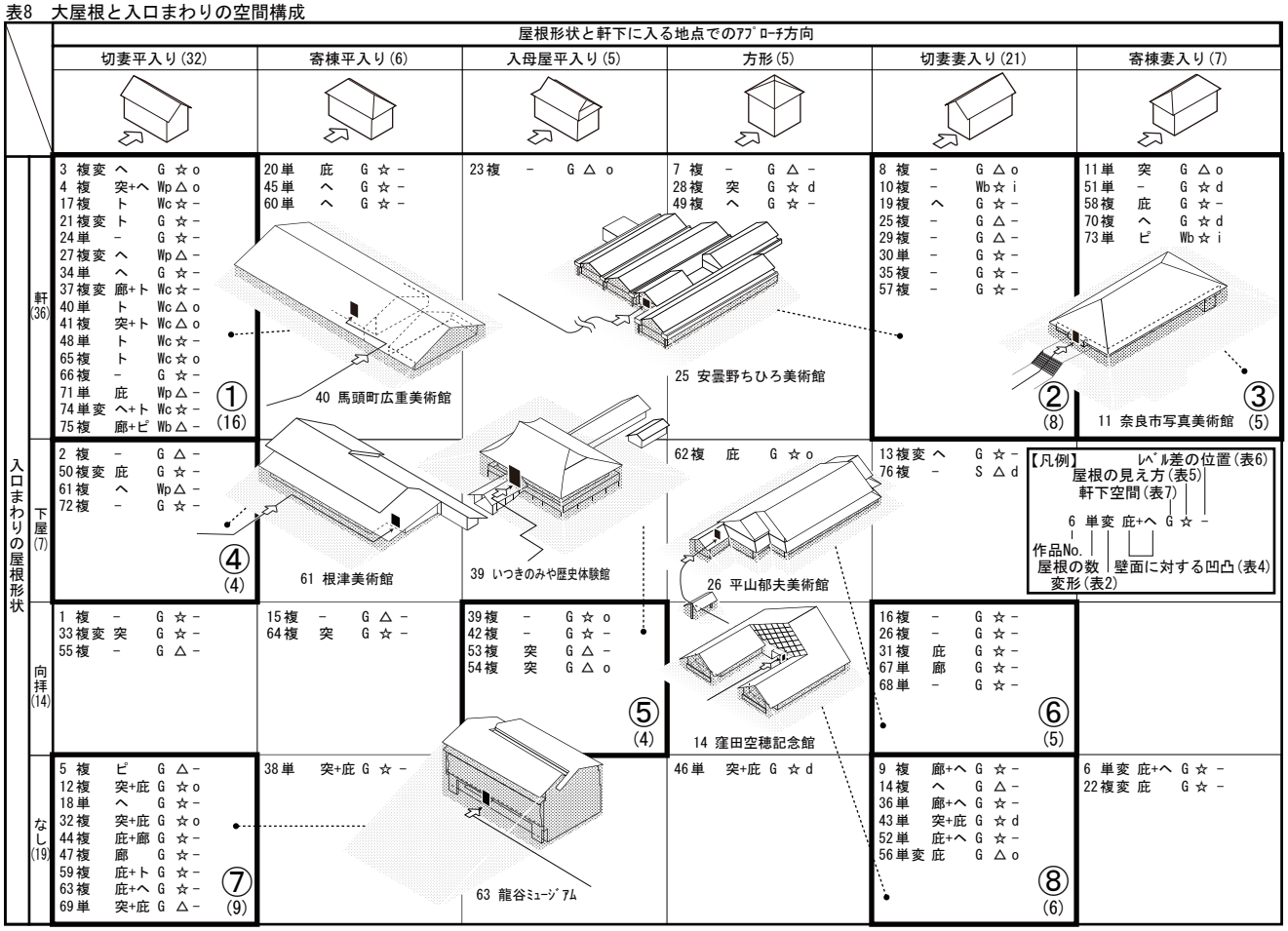


表9　事例ﾘｽﾄ

1 出石町立伊藤美術館	12 海の博物館	23 MIHO MUSEUM	34 50M―櫟の森美術館	45 勝山館跡ｶﾞｲﾀﾞﾝｽ施設	56 ﾍﾟｰﾊﾟｰﾃｲﾅｰ美術館	67 式年遷宮記念 せんぐう館
2 武石村ともしび博物館	13 信州高遠美術館	24 小町の舎	35 ｾｷｹﾞﾁ・ﾄﾞｰﾙｶﾞｰﾃﾞﾝ	46 吉田正音楽記念館	57 ﾉﾏﾃﾞｨｯｸ美術館	68 いわき回廊美術館
3 塩沢町立今泉博物館	14 窪田空穂記念館	25 安曇野ちひろ美術館	36 ｻﾝﾄﾞｱﾐｭｰｼﾞｱﾑ「かわもと音戯館」	47 島根県芸術文化ｾﾝﾀｰ	58 三重県立熊野古道ｾﾝﾀｰ	69 はじまりの美術館
4 川越市立博物館	15 式年遷宮記念 神宮美術館	26 平山郁夫美術館	37 牧野富太郎記念館	48 済州島3つの美術館「風」	59 ねむの木こども美術館	70 竹中大工道具館新館
5 おぼろ月夜の館/斑山文庫	16 高知県立美術館	27 竹風堂松代店・池田満寿夫美術館	38 東京国立博物館平成館	49 ﾗﾑﾈ温泉館	60 佐川美術館 樂吉左衛門館	71 宮畑遺跡史跡公園体験学習施設
6 田野畑民族資料館	17 天草ﾋﾞｼﾞﾀｰｾﾝﾀｰ→展望休憩所	28 田辺市立美術館	39 いつきのみや歴史体験館	50 ゑしんの里記念館/恵信尼公御廟所	61 根津美術館	72 MIZKAN MUSEUM(MIM)
7 神長官守矢史料館	18 西堀榮三郎記念 探検の殿堂	29 うしぶか海彩館	40 馬頭町広重美術館	51 小倉百人一首殿堂 時雨殿	62 世界遺産 熊野本宮館	73 洸庭
8 加藤栄三・東一記念館	19 ﾆｷ美術館	30 森美術館	41 那須歴史探訪館	52 葛生傳承館	63 龍谷ﾐｭｰｼﾞｱﾑ	74 EPFL ArtLab
9 曽我・平澤記念館	20 MUSEUM as it is	31 いわむらかずお絵本の丘美術館	42 総本山醍醐寺 霊宝館・伝法学院	53 萩博物館	64 九州歴史資料館	75 福井県年縞博物館
10 ｵｰﾄﾎﾞﾘｽ・ｱｰﾄ・ﾐｭｰｼﾞｱﾑ	21 淡海書道文化専門学校付属施設 観峯館	32 茨城県天心記念五浦美術館	43 九谷焼窯跡展示館	54 長崎歴史文化博物館	65 真壁伝承館	76 福田美術館
11 奈良市写真美術館	22 愛媛県歴史文化博物館	33 北九州市立 松本清張記念館	44 御所野縄文博物館	55 南方熊楠顕彰館	66 東大寺総合文化ｾﾝﾀｰ	